



関畑遺跡
第1文化層出土の石器



上宮田台遺跡
イノシン形土製品



上宮田台遺跡
土偶

平成27年度出土遺物公開事業「館山道の遺跡展」
(袖ヶ浦市郷土博物館会場)

はるかなる 西上総の歴史



椿古墳群
前期古墳の副葬品



山谷遺跡
中世の陶磁器

展示開催館

袖ヶ浦市郷土博物館

袖ヶ浦市下新田1133 ☎0438-63-0811

平成28年1月5日(火)～2月14日(日)

【休館日:1月12日・18日・25日、2月1日・8日】

【解説会:1月16日(土)・2月6日(土) 11時30分～12時30分】

【主催】(公財)千葉県教育振興財団

【後援】千葉県教育委員会・木更津市教育委員会・君津市教育委員会
富津市教育委員会・袖ヶ浦市教育委員会

【協力】木更津市郷土博物館金のすず・袖ヶ浦市郷土博物館

【問合せ】(公財)千葉県教育振興財団文化財センター

☎043-424-4850 http://www.echiba.org/bunkazai_top.html

講座

第133回「袖ヶ浦学」

日時:1月23日(土) 午後1時30分～午後3時(受付午後1時～)

会場:袖ヶ浦市郷土博物館 研修室

演題:「旧石器時代の人々の暮らしと道具」

講師:橋本 勝雄 (公財)千葉県教育振興財団文化財センター

定員:40名(申込み先着順・電話または受付で申込み)

参加費:100円(保険料・資料代)

問合せ:袖ヶ浦市郷土博物館 ☎0438-63-0811

ごあいさつ

千葉県では、年間450件ほどの発掘調査が行われ、房総各地の歴史と文化を伝える貴重な成果が数多く得られております。その調査成果については、遺跡見学会や展示会をはじめ、ホームページや広報紙『房総の文化財』などの刊行物等で順次紹介してまいりました。

今回企画した展示会は、館山自動車道(東関東自動車道千葉・富津線)の建設に伴って調査された多くの遺跡の中から、西上総の地域にあたる袖ヶ浦市から富津市にかけての主な遺跡の発掘調査成果を「館山道の遺跡展－はるかなる西上総の歴史－」と題して紹介するものです。

西上総地域の歴史を築いてきた旧石器時代から中世にかけての多様な文化の様相を感じていただき、埋蔵文化財保護へのご理解をお願い申し上げます。

最後になりましたが、ご協力をいただきました関係機関並びに関係者の皆様に、心からお礼申し上げます。

公益財団法人 千葉県教育振興財団

- 凡例
- 1 本図録は、平成27年度出土遺物公開事業「館山道の遺跡展」の袖ヶ浦市郷土博物館での展示解説図録です。
 - 2 展示資料のうち、袖ヶ浦台山遺跡・上宮田台遺跡は千葉県教育委員会所蔵、袖ヶ浦市関畑遺跡・椿古墳群・山谷遺跡は袖ヶ浦市教育委員会所蔵です。
 - 3 本展示は、文化財センター長 小久貴隆史・整理課長 岸本雅人の指導のもと、上席文化財主事 栗田 則久が担当し、図録の執筆及び編集も栗田が行いました。

館山自動車道

館山自動車道(東関東自動車道千葉・富津線)は、千葉市中央区の京葉道路から富津市の富津竹岡ICに至る路線延長55.7kmの高速道路として、東日本高速道路株式会社(NEXCO東日本)によって計画されました。2期に分けて事業化され、1期目の千葉・木更津線の発掘調査は、路線内に所在する27遺跡を対象に、昭和53年度～平成6年度まで、2期目の木更津・富津線は、平成9年度～平成18年度まで、25遺跡を対象に発掘調査が行われました。調査された遺跡は総数52遺跡に及び、その後の整理作業を経て合計25冊の発掘調査報告書が刊行され、多くの貴重な成果を得ることができました。



I 文化のあけぼの

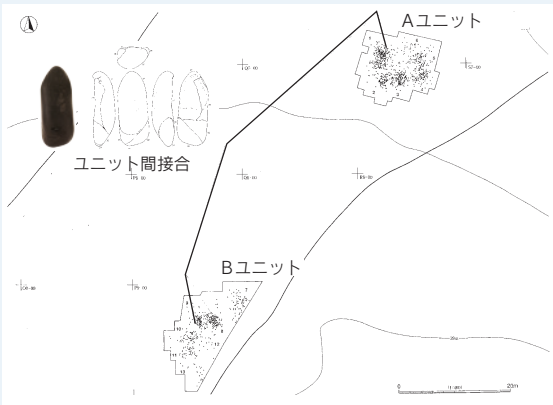
旧石器時代

第四期更新世(約260万年～1万3千年前)において、狩猟や採集の存在が確認された時代を旧石器時代と呼んでいます。房総では、最終氷期後半期に相当する旧石器時代の遺跡が確認されています。この時期は、一般的に寒冷で、気候変動も激しいものでした。そのため、海水面の大幅な低下による海岸線の後退が想定されています。

館山道の路線内では、数多くの旧石器時代の遺跡が調査され、立川ローム層のX層(約3万5千年前)～Ⅲ層(約1万3千年前)までの各時期の石器が発見されています。特に、袖ヶ浦市関畑遺跡では、60mほど離れた2群の環状ブロックが発見されました。また、袖ヶ浦市台山遺跡では、環状ブロックに後続する時期のⅨa層に生活面をもつ石器群も確認されています。

袖ヶ浦市関畑遺跡

本遺跡からは、総数3,448点の石器が発見されました。その中で注目されるのが、第1文化層(X層上部～Ⅸc層下部)に広がっている2か所の環状ブロックです。約60m離れたAユニット(直径12m～13m)とBユニット(直径20mほど)間で石器の接合が確認されました。このことは、2つの環状ブロックが同時に形成され、お互いに緊密な関係を持っていたことを示しています。



環状ブロックの分布とブロック間接合



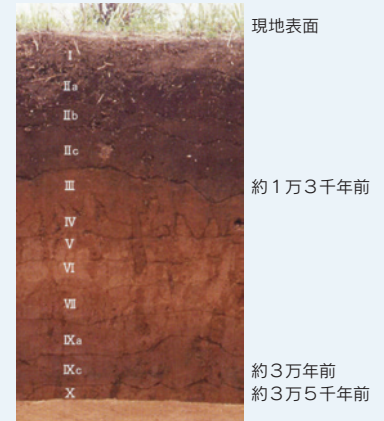
第1a文化層Aユニット(X層上部～Ⅸc層下部)の石器

第1a文化層Aユニット

このユニットは、6か所のブロックで形成され、出土した石器数は825点を数えます。主な器種は、ナイフ形石器やこの時期に特徴的な台形様石器、楔形石器などで、使われた石材のうち、596点(72%)は千葉県南部の嶺岡産珪質頁岩と、非常に高い割合を示しているのが特徴的です。

袖ヶ浦市台山遺跡

本遺跡からは、総数921点の石器が発見されました。そのほとんどが、第I文化層と呼ばれるⅨa層(約2万8千年前)に生活面をもつ石器群でした。この文化層は、24か所の小さなブロックと呼ばれる石器のまとまりに分かれ、特に台地平坦面中央部に集中する傾向が認められます。関畑遺跡のような環状ブロックに近い分布を示しますが、中央部に空白部分がないことや、環状ブロックに特有の台形様石器が1点も出土していないことなどから、X層～Ⅸc層にみられる環状ブロックに後続する時期の石器群と考えられます。



土層の堆積状況と土層
(参考：印西市復山谷遺跡)



旧石器時代各ブロックの分布状況



第I文化層出土の石器

第I文化層からは、915点の石器が出土しており、剥片類が主体を占めますが、13点のナイフ形石器と11点の楔形石器が本文化層の特徴的な器種となります。石材は、ガラス質黒色安山岩が最も多く、次いで、流紋岩、チャート、珪質頁岩が多くみられます。

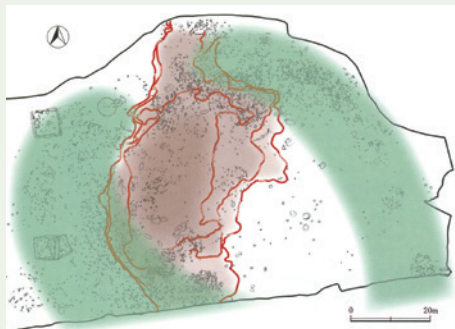
旧石器時代から縄文時代へと移行する時期は、地球規模で温暖化が進み、環境の変化とともに生活にも大きな変革が起こり、様々な道具が作られました。そのはじまり(草創期)は約1万3千年前、終わり(晩期)は約3千年前と考えられています。

ここで取り上げた袖ヶ浦市上宮田台遺跡は、木更津ジャンクションで館山自動車道と接続する首都圏中央連絡自動車道(圏央道)建設に伴って発掘調査された遺跡です。この遺跡は、直径100mほどの大型の「環状集落」とともに、大量の土偶が発見された遺跡として注目されました。

袖ヶ浦市上宮田台遺跡

上宮田台遺跡は、太平洋に注ぐ小櫃川^{おびつがわ}の支流である鎗水川^{やりみずがわ}に面した標高65mほどの台地上に位置しています。平成14年～16年に発掘調査が行われ、縄文時代中期末(約4,200年前)～晩期中葉(約2,600年前)にかけての環状集落を中心とした大規模なムラが確認されました。

特に、後期前葉(約4,000年前)～晩期初頭(約3,000年前)までの1,000年間ほどは、竪穴住居約80軒や土坑などが、直径約100mのドーナツ形に配置されています。晩期前葉(約2,800年前)には、中央部分が大きく窪地状に削られ、内側に竪穴住居約20軒や墓の可能性のある土坑約20基などが作られ、新たなムラが形成されたようです。



上宮田台遺跡の環状集落の広がり(時期別)
(緑：後期前葉～晩期初頭、茶：晩期前葉～中葉)



上宮田台遺跡全景



窪地内の遺物出土状況

中央窪地には、縄文時代晩期中葉(約2,600年前)の遺物が多量に見つかっています。土器のほか、土偶やイノシシ形土製品、土版、環状土製円盤、耳飾り、ミニチュア土器などの土製品、石剣・玉類・石棒などの石製品、加工の痕跡のある石器類などが残されていました。遺物は、いくつかの地点にまとまって見つかり、集中地点内あるいは近接する地点間で破片の接合が多くあり、その場で意図的に壊された可能性が考えられます。



イノシシ形土製品

後ろ足を欠損しています。胴部の文様は、同時期に作られた土器の文様を忠実に反映しています。千葉県では、晩期にイノシシ形土製品の発見が目立つようになります。



顔面のみ。頭部両側が上方に突出。東北地方の影響。

さまざまな土偶



顔面は東北地方の影響、首からは関東地方の伝統。



右腕、左足を欠損。腕と足はきわめて短い。



頭部と上半身右半分を欠損。腕と足に力こぶを表現。



人面付土版

Ⅱ-1 古墳時代のムラと墓

古墳時代

古墳時代のはじめ頃(約1,800年前)は、弥生時代の影響を残す集落がみられる一方で、畿内地方や東海・北陸地方の土器やその影響を強く受けた土器がムラに入ってくるにより、新たな時代の幕開けを迎えるようになりました。

このような土器は県内各地で見つっていますが、特に市原市から富津市にかけて西上総を中心とした東京湾東岸地域に集中しています。西からの文化や人びとが東京湾を渡って移動してきたことを示すものです。

袖ヶ浦市台山遺跡

発掘調査は、平成4年11月～平成5年3月まで、9,800㎡を対象に行われ、竪穴住居跡110軒、方形周溝墓6基を調査しました。

この遺跡で発見された竪穴住居や墓は、すべて古墳時代前期(約1,800年前～1,700年前)に営まれており、この時期以前も以後にもムラは存在しないことから、無住の地に突如として墓を伴う大きなムラが出現し、短期間で姿を消しているようです。そこには、いずれかの地からの集団移住と地域の拠点的な開発があったことを示しているのでしょう。



重なり合った古墳時代の竪穴住居跡



098号竪穴住居跡全景

南から見たこの竪穴住居跡(098号竪穴住居跡)は、4本の柱穴と南側壁近くに入出口ピット、南東コーナー近くには貯蔵穴が掘り込まれています。また、北側の柱穴間に炉が位置しています。古墳時代前期の一般的な住居構造を示しています。

この遺跡からは、住居の構築部材の炭化物が残った竪穴住居跡が20軒ほど見つっています。086号竪穴住居跡もその一例で、炭化材は、分析の結果、柱や屋根の構造材であるアカガシやイヌガヤ、屋根材と思われるタケやススキ、構造材の結束に使われたイタビカズラなどの樹種であることが明らかとなりました。

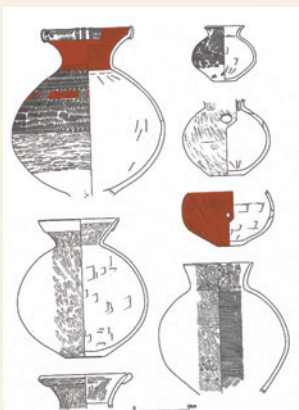


086号竪穴住居跡炭化材出土状況



086号竪穴住居跡
古墳時代前期の土器(約1,750年前)

この時期は、東海地方や近畿地方の土器の影響を受けた土器が主体を占めています。特に、左上の甕は、「S字口縁」の甕と呼ばれ、東海地方に起源をもつ土器です。形や技法をまねて地元で作られたようです。



011号方形周溝墓出土土器
(古墳時代前期、約1,800年前)



011号方形周溝墓遺物出土状況



012・013号方形周溝墓全景

6基発見された方形周溝墓のうち、3基は集落の西端部、2基は東端部に位置しており、居住域と墓域が意図的に分けられていたと考えられます。また、土器が多量に見つかった011号と086号は、ほかと比べて規模も大きく、有力者を埋葬した古墳時代前期の方墳となる可能性があります。

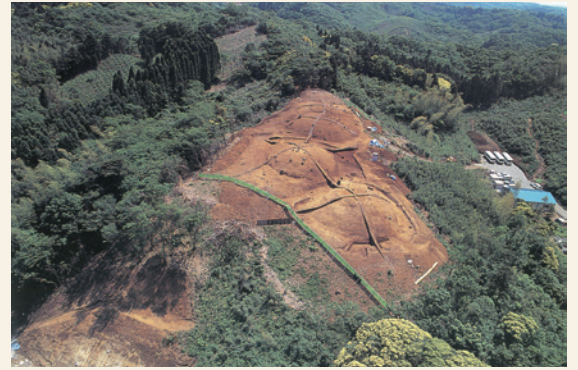
Ⅱ-2 尾根上にそびえる古墳群

古墳時代

君津地方は、県内で最も早い時期に古墳が築造された地域の一つで、主要河川の小櫃川流域に房総最古級の前方後方墳である木更津市高部32号墳・30号墳をはじめとした古墳時代前期の古墳が集中して営まれています。館山自動車道建設に伴って発掘調査されたのが、小櫃川中流域南岸の丘陵上に位置する袖ヶ浦市^{つばき}椿古墳群です。椿古墳群は、前方後円墳4基を含む60基以上の古墳で構成される大規模な古墳群です。時期的には、古墳時代前期の古墳は1基のみで、ほかは古墳時代後期～終末期の古墳となります。

袖ヶ浦市椿古墳群

発掘調査は、平成3年1月～平成4年7月まで、11基の古墳を対象に行われました。その結果、古墳群は、前期(3世紀末～4世紀初頭)の方墳1基、古墳時代後期～終末期(6世紀後半～7世紀初頭)の前方後円墳1基と円墳9基であることが明らかとなりました。



椿古墳群全景



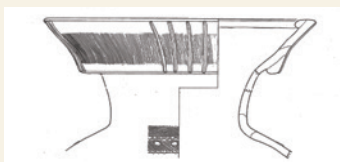
SX-3全景



SX-3墳丘裾部遺物出土状況



SX-3埋葬施設内副葬品



SX-3の墳丘裾部から出土した大廓式土器

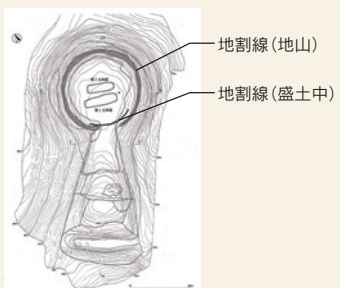
SX-3から出土した「大廓式土器」は、静岡県東部の駿河湾周辺に分布の中心をおく土器です。この土器は、そこから持ち込まれた土器と考えられ、東海地方と関係した被葬者像が浮かび上がってきます。



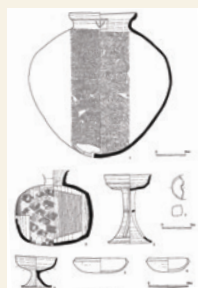
SX-8前方後円墳全景



SX-8後円部東側の地割線(地山・溝)



SX-8平面図



SX-8出土土器(須恵器・土師器)



SX-9円墳出土直刀の鏢(銀象嵌)

SX-9円墳の埋葬施設から発見された長さ94cmの直刀の鏢には、渦巻き状の銀象嵌が加えられていました。銀象嵌とは、鑿で彫り込んだ溝に銀線を嵌め込む技法で、古墳時代後期から終末期の主要な古墳で比較的多くみられます。

Ⅲ 鎌倉街道と街村

鎌倉時代～戦国時代

律令時代の小櫃川流域には、下流域～中流域に上総国望陀郡、中流域～上流域に群蘇郡が位置していました。鎌倉時代になると、望陀郡には、近衛家領菅生庄(中流域左岸)、得宗領鉄富庄(中流域右岸)、国領領金田保(下流域)が、群蘇郡はほぼ全域熊野山領群蘇庄として成立しています。群蘇庄に関連する文献史料によると、永仁3(1295)年に、群蘇庄の年貢が東京湾から太平洋を経由して紀伊の熊野社まで運ばれていたこと、応永8(1375)年には、円覚寺の造営料として徴用された用木が小櫃川を利用して、東京湾から鎌倉に運搬されたことが確認できます。

このように、鎌倉時代から戦国時代のはじめ頃までは熊野社や鎌倉幕府との関係が強く、物資の輸送や人々の移動に、小櫃川の水運を利用していたことが考えられます。今回紹介する袖ヶ浦市山谷遺跡では、中世～近世の主要道路である「鎌倉街道」が見つかっており、山谷遺跡の集落は、そのような交通や流通の整備・発展の中で生まれた街村と想定することができます。

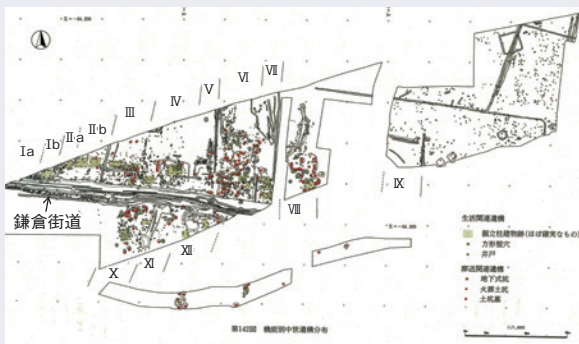


山谷遺跡全景(東から)
中央を走る現道の下で「鎌倉街道」が発掘されました。

袖ヶ浦市山谷遺跡

山谷遺跡は、平成4年1月～平成6年6月まで、18,200㎡を対象に発掘調査が行われました。その結果、遺跡をほぼ東西に走る「鎌倉街道」を中心に、溝や道、並木状植栽等によって南北方向に区画された12の区画割が確認されました。ほとんどの区画に掘立柱建物跡と土坑墓が存在し、ほかに竪穴建物跡や柵列、井戸、地下式坑などが伴う区画もありました。

掘立柱建物跡は、鎌倉街道に沿うように建てられ、周辺に建物に付随するかのようには墓が設けられています。このことから、屋敷としての建物と屋敷墓としての土坑墓という性格が考えられ、生活空間と葬送空間が同居するような景観が推測されます。全体を見渡した中世景観は、まさに、「鎌倉街道」を中心とした「街村」であり、掘立柱建物の規模の差からは、区画によって階級差があったことが考えられます。



区画割と中世の遺構分布図



現道下で発掘された「鎌倉街道」

調査範囲西側で長さ133mにわたり確認された中世～近世の「鎌倉街道」の道路跡です。上端部で幅4.5m～9.0mと一定していませんが、道路底面両側に側溝が有しています。



山谷遺跡から出土した中世陶磁器

山谷遺跡からは、貿易陶磁である白磁や青磁、褐釉壺類のほか、瀬戸・美濃、志戸呂、渥美、常滑などの国産陶器、瓦質土器・カワラケなどの土器類が出土しています。特に、常滑製品が圧倒的に多く、その年代は13世紀～15世紀と考えられ、村の存続時期もこの頃と思われます。

この整形区画内に、建て替えを加えた梁行3.6m、桁行6.9mの本遺跡の中では最大の掘立柱建物跡が存在していました。周囲には、建物と庭を囲むような垣根が想定されることから、この建物を含む区画は格式の高い屋敷地と考えられます。



IV区のSX005台地整形区画



VIII区の台地整形区画全景

台地整形区画とは、地面を広範囲に掘りくぼめ、内部に建物跡や井戸、水溜に使用されたとと思われる粘土貼土坑、貯蔵用の倉庫と考えられる地下式坑など多種多様の遺構が設けられた、中世によくみられる遺構です。

展示関係略年表

世紀	時代	主なできごと	館山道の各遺跡とできごと
35,000年前	旧石器時代	氷期が続く 狩猟や採集をしながら移動生活	人々が住み始める 袖ヶ浦市関畑遺跡 袖ヶ浦市台山遺跡
13,000年前			
10,000年前	縄文時代	草創期 土器をつくり始める	大きな環状集落が形成 袖ヶ浦市上宮田台遺跡
7,000年前		前期 本格的なムラがつくられ始める	
6,000年前		中期 大きな貝塚・ムラができる	
5,000年前		後期	
4,000年前		晩期	
2,500年前	弥生時代	前期 稲作が始まる	
2,300年前		中期 環濠集落の出現、房総でも稲作開始	
2,000年前		1世紀 後期 各地に小さな国が誕生、身分の格差	
1,900年前		2世紀	
1,800年前		3世紀	
1,700年前	4世紀	前期 ヤマト王権の確立 奈良に出現期の古墳がつくられる	方形周溝墓を伴う大きなムラが出現 袖ヶ浦市台山遺跡 袖ヶ浦市椿古墳群
1,600年前	5世紀	古墳時代 中期 倭の五王の時代 各地に巨大な前方後円墳がつくられる	袖ヶ浦市椿古墳群
1,500年前	6世紀	後期 群集墳の盛行	
1,400年前	7世紀 (飛鳥時代)	645大化の改新	

(奈良・平安時代省略)

900年前	12世紀	鎌倉時代	1192源頼朝、征夷大將軍となる	鎌倉街道に沿った「街村」の出現 袖ヶ浦市山谷遺跡
800年前	13世紀		1221承久の乱	
700年前	14世紀		1333鎌倉幕府滅亡	
600年前	15世紀	南北朝時代	1467応仁の乱	
		室町時代	1573室町幕府滅亡	
500年前	16世紀	戦国時代	1590豊臣秀吉全国統一	
400年前	17世紀	江戸時代	1603徳川家康征夷大將軍となる	

●発行日：平成27年12月28日

●編集・発行：公益財団法人千葉県教育振興財団 〒284-0003 四街道市鹿渡809-2

●印刷：株式会社エリート情報社